ローベルト・ディスマンという生き方

―― 労働組合と社会主義政党の間で ――

枡　田　大知彦

Ⅰ　はじめに

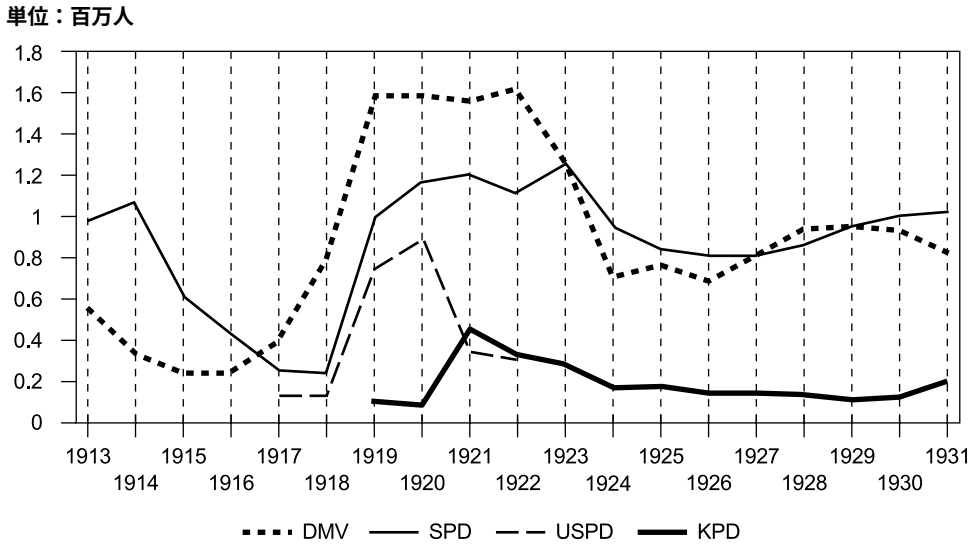
ローベルト・ディスマン（Robert Dißmann 1878–1926）は，両大戦間期，世界最大の単位組合であったドイツ金属労働者組合（DMV）の代表だった男である。現在，ドイツの金属産業労働組合（IG–Metall）は，世界最大級の単位組合であるが[1)]，DMV はその前身にあたる。社会民主党と密接にかかわる自由労働組合の傘下にあり，組合員数にしてその約20%を占める最大の単位組合であった。DMV と IG–Metall との間には，ナチス期という断絶があるのだが，1891年６月の DMV 創立（組合員数23,205人）から1933年ナチ政権成立までの間で，ディスマンが代表を務めた1919年から1926年，とくにその前半は，組合員数が最も多い時期にあった（**図１**参照)。すなわち，ディスマンは，およそ７年もの間，世界の労働側で，規模的には最大の力をもった指導者の一人だったのである。この一事からだけでも，少なくともドイツの労働史においては，注目されてしかるべき人物のように思われる。

だが，既存の研究におけるディスマンに対する言及は，驚くほど少ない。(西）ドイツにおける労働運動史・労働組合史研究においては，DMV の代表として時折名前があがるのみで，彼がなしたこと，功績を称えるような記述はあまり見受けられず，少なくともディスマンに，高い評価を与えた研究はほとんどないといってよい[2)]。また，IG–Metall 自体が出版した『75

1）前川朋久・久本憲夫「特集：日本とドイツにおける産別・組合再編」『Int'lecowK（国際経済労働研究)』2005年８月，15頁。1994年は約300万人。一貫してドイツ最大の単位組合であったが，2004年は約243万人であり，統一サービス組合に１位の座を明け渡した。

2）例えば，比較的ディスマンについて触れている以下の研究でも高く評価されているとは言い難い。Winkler, H. A., *Von der Revolution zur Stabilisierung : Arbeiterbewegung in der Weimarer Republik 1918 bis 1924*, Berlin / Bonn 1984 ; Potthoff, H., *Freie Gewerkschaften 1918–1933*, Düsseldorf 1987 ; Opel, F., *Der Deutsche Metallarbeiter-Verband*, Köln 1980. とくに S. 100–102を参照。ポットホッフの1979年の著作は，より多くディスマンに触れてはいるが，本書から彼の生涯・活動の全体像は見えてこない。Potthoff, *Gewerkschaften und Politik zwischen Revolution und Inflation*, Düsseldorf 1979.

図１　DMV 組合員数および政党の党員数の変遷



（出典・注）DMV は，Vorstand der IG-Metall (hrsg.), *100 Jahre Industriegewerkschaft 1891 bis 1991*, Köln, 1991, S. 598より。SPD は，Niemann, H., *Geschichte der deutschen Sozialdemokratie 1917 bis 1945*, Berlin 1982, S. 535 ; *Protokoll über die Verhandlung des Parteitag der SPD 1917*, S. 10より（第一次大戦前は，1906年約38万人，1912年約97万人と徐々に増大)。USPD は，Krause, H., *USPD : zur Geschichte der Unabhängigen Sozialdemokratischen Partei Deutschlands*, Frankfurt a. M. 1975, S. 303より。KPD は，*ebenda* ; O. K. フレヒトハイム・H. ウェーバー『ワイマル共和国期のドイツ共産党』高田璽郎訳，ぺりかん社，1980年，338頁より。いずれも大会での報告に基づくが，USPD の17－18年は，USPD による公称，KPD は登録党員数である。KPD の1921年の数値は３月行動以前の１月のもので，８月の数値は341,764人である。

年史』，『100年史』においては，さすがに名前こそある程度出てくるが，あくまで副次的にのみ言及されているにすぎない。これらには，1921年以降行動を共にする場合が多かった盟友，職員組合のナショナルセンター，AfA-Bund 代表のアウフホイザー（Siegfried Aufhäuser）による回想が掲載されている。だがその内容は，常に忙しく働き，常に一生懸命であった，という人物評にとどまる[3)]。1999年，ようやく東ドイツ系の雑誌に，ホフマン／ジーモンによる短い「伝記的スケッチ」が掲載された[4)]。だが，そこでの記述は，ディスマンの政治家あるいは政党人の面に偏っており，また，第二次大戦後からみた場合，彼の最大の「仕事」の一つと

3）Industriegewerkschaft Metall für die Bundesrepublik Deutschland (hrsg.), *Funfundsiebzig Jahre Industriegewerkschaft 1891 bis 1966*, Frankfurt a. M. 1966, S. 259 ; Vorstand der IG-Metall (hrsg.), *100 Jahre Industriegewerkschaft 1891 bis 1991*, Köln 1991, S. 215-20, 243-46, 259-60.「卓越した指導者」であったとの記述はあるが，同時に「雑用の達人」であったことが強調される。

4）Hoffmann, J., Simon, G., “Linker Gewerkschaftsführer und unabhängiger Sozialdemokrat : Robert Dißmann (1878-1926)”, in : *Beiträge zur Geschichte der Arbeiterbewegung*, Berlin 1999, S. 106-21.

評価されるべき「組織問題」については[5]，数行触れるのみにとどまっている。勿論この「スケッチ」はディスマンの再評価の第一歩と言え，本稿でもその内容にやや詳細に立ち入ることにする。そこでも「学術的に基礎付けられたディスマンのバイオグラフィーはこれまで存在しなかった」ことが強調されているのである。

ディスマンがこれまで評価されてこなかった原因の一つは，その曖昧かつ微妙な政治的・党派的な立場/位置取りにある。彼は，20歳になる直前にドイツ社会民主党（SPD）に入党して以来，改良主義的な立場をとるその指導部を一貫して強く批判してきた。第一次大戦前には党内左派の代表的論者の一人となる。第一次大戦開戦後，国家・軍に協力する方針をとったSPD指導部を批判する形で形成されたドイツ独立社会民主党（USPD）[6]の創立に参加した。だが，1922年の事実上のUSPD解体に伴い，SPDに復党した。そして1926年にその生涯を終えるまで，SPDに在籍していたのである。

上記のごとき，党遍歴をもつディスマンは，左右双方からの批判に晒されてきた。まず，SPD指導部およびそれと密接な関係がある自由労働組合指導部からは，「過激派」として批判された。彼自身，自分が常に「左側」にあったことを明言しているし[7]，彼にとっての最大の批判の対象は，常に国家やブルジョワ勢力との間に妥協的あるいは協力的な関係を取り結ぶSPD指導層，自由労働組合指導層であった。従って右派勢力からの批判は，おそらくディスマンも承知の上のものであり，客観的に見ても正当な批判といえるだろう。事実，ディスマンは，ドイツ共産党（KPD）の創立者の一人として名高いローザ・ルクセンブルク（Rosa Luxemburg）

5）筆者はこれまで，ワイマール期の自由労働組合において展開した産業別組合への再編成をめぐる諸問題（「組織問題」）を研究テーマとしてきた（例えば，枡田「ワイマール期自由労働組合におけるスト規定と組織〈再編成〉問題」『歴史と経済』第189号，2005年10月，18–34頁等を参照）。「組織問題」は，第二次大戦後の労働組合組織のあり様に，一定の影響を与えた問題であり，この問題をめぐる議論を提起したという点で，ディスマンを積極的に評価することが可能であると考えている。本稿では，彼がこうした議論を提起した背景・論理の一端が明らかにされるが，その詳細な検討には，別の機会を用意したい。

6）USPDは，1917年４月，SPD指導部の戦争協力政策に反対する同党員が，同党から離脱あるいは追われる形で創立された。図１にみるように，結党当時からSPDの約半数の党員を抱えていた。国会での議席数は，結党時は18，19年１月選挙では22（全議席の約5.3%，SPDは163）であったが，20年６月選挙では84（同約18.7%，SPDは102）と急増した。以下に見るように，次の選挙までに党は分裂・消滅する。Krause, *a. a. O.*, S. 312–14（書名等は図１の出典欄を参照）. 後述する「中央派」のメンバーを中心に，ベルンシュタイン（Eduard Bernstein），ローザ・ルクセンブルク，リープクネヒト（Karl Liebknecht）等，多様な立場の有力な（元）SPD指導者らが，戦争反対という唯一の共通項により結集した「大戦・革命期のみに存在した」党であった。倉田稔氏は，「ボルシェビキとは違い，さりとて右派の社会民主党とも違う，一つの独特の運動体であって，今日おいても高く評価できる政党であった」とする。倉田稔「ドイツ独立社会民主党とヒルファディング外伝，1918年まで」『商学討究』第48巻第１号，1997年７月，１頁。

7）Hoffmann, Simon, a. a. O., S. 118.

を尊敬しており，彼女がディスマンを高く評価していたという記述も残されている。また，その弟子であり KPD の代表も務めたパウル・レヴィ（Paul Levi）とは[8]，生涯を通じた友人であり，とりわけ人生の末期，盟友関係にあったのである。

だが，ディスマンに対する批判の中で，最も辛辣かつ敵意に満ちていたものは，左派とりわけ KPD あるいは USPD 左派からの批判であった。「変節者」，「ペテン師」，「無分別のおしゃべり」，「労働組合官僚」，「使用者の手先」，「労働者の裏切り者」[9] … これらはすべて KPD 等から，ディスマンに浴びせられた言葉である。

だが，この時期に，ディスマンのように党遍歴を重ねた人物は珍しくない。むしろ，ディスマンが属していたとされる SPD 内の左翼的潮流，マルクス主義中央派[10]，またそのメンバー

8）レヴィは，法廷でルクセンブルクの弁護人を務めたこともあり，一貫して彼女と行動を共にした。16年のスパルタクス団結成，19年の KPD 創立にも参加し，その約２週間後，ルクセンブルクとリープクネヒトが殺害されると KPD の代表の座に就いた。同党最初の国会議員ともなった。安易な直接行動およびコミンテルンの独裁を拒否するなど，ディスマンと考え方が近い。21年２月党代表を更迭され同年除名された。22年４月 USPD に入党し，その後はディスマンと行動を共にした。フレヒトハイム他，前掲書，144–54頁（書名等は図１の出典欄を参照）。それゆえ東ドイツの研究では，批判される場合が少なくない。*Geschichite der deutschen Arbeiterbewe-gung : biographisches Lexikon*（以下，本資料は *Biographisches Lexikon* と略記する），Berlin 1970, S. 285–87.自身が編集人を務める通信誌においてディスマンに対する追悼文を綴っている。そこで，ディスマンを「社会主義的な労働組合運動のシンボル」，「場合によっては，ある世代の最強の指導者かもしれない」と高く評価している。Levi, “Robert Dißmann”, in : *Sozialistische Politik und Wirtschafts*, 4. 11. 1926, Nr. 44, S. 1.

9）Institut für Marxismus-Leninismus beim Zentralkomitee der Sozialistischen Einheitspartei Deutschlands (Hrsg.), *Dokumente und Materialien zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung*（以下，本資料は，*Dokumente und Materialien* と略記する），Bd. 7, 1. Halbb., Berlin 1966, S. 417–19. 1921年１月21日の KPD 機関紙『ローテ・ファーネ』に掲載されたものである。

10）「マルクス主義中央派」とは，1906年前後に SPD 内部で展開した「大衆スト論争」を背景とし，1910年頃形成された，SPD の理論的指導者カウツキー等を中心とする SPD 内部の潮流である。その立場は，「マルクス主義の理論を捨て『改良』だけで社会主義を到達しようとする修正主義派」，また「革命の主体的・客観的条件を無視し革命を『人為的に製造』しようとする急進派」の双方に反対する，というものであった（相田慎一『カウツキー研究 :民族と分権』昭和堂，1993年，304頁）。前者の立場をとるものが，SPD 指導部，自由労働組合指導部（総務委員会）であり，後者の立場をとるものが，KPD や USPD 左派の一部である。当然各派内部でも立場の違いはあるが，本稿では，前者を右派，後者を極左派と呼ぶことにする。マルクス主義中央派の立場は，暴力的な革命ではなく，合法的に，議会活動を通じて，社会主義への体制の転換を目指すというものといえる。一時期 SPD で主導権を握った。この潮流に関しては相田氏の前掲書のほかに，村瀬興雄『ドイツ現代史』東京大学出版会，1962年，174–89頁，山本佐門『ドイツ社会民主党とカウツキー』北海道大学図書刊行会，1981年，151–210頁等を参照。いずれもディスマンには触れていない。彼を「中央派」と分類したものとして，Beier, G., “Einheitsgewerkschaft”, in : *Geschichte und Gewerkschaft*, Köln 1981, S. 316 ; *Biographisches Lexikon*, S. 94–95 ; Morgan, D., *The Socialist Left and the German Revolution : a History of the German Independent Social Democratic Party, 1917–1922*, Cornell University Press 1975, p. 60.

が中心となって創立したUSPDに属していた者たちは，後世から高い評価を受ける場合が少なくない。名のみ列挙すれば，カウツキー（Karl Kautsky），ヒルファディング（Rudolf Hilferding）等は，時期こそずれるが，「中央派」～USPD～SPDというディスマンと同じ経路を辿った。またUSPD，KPD両党の代表を務めたドイミヒ（Ernst Däumig）等は，USPDから離党した後，それに再合流している。修正主義派ベルンシュタインもSPD～USPDそしてまたSPDへと戻っている。とくにヒルファディングらとディスマンは，例えば多くの場合「USPD右派」と分類されるように[11]，イデオロギー的立場に一定の範囲で共通性があると考えられる。だが，彼等と比べようもない程，ディスマンが評価されていないことは勿論，彼等を扱う研究においてもほとんど触れられることすらなかった[12]。なぜとりわけディスマンが，「変節者」と強く批判されるのであろうか。

同時代的に，KPD等（極）左派がディスマンを強く批判した理由は，ある意味では明白である。いくつかの重要な問題に関して，ディスマンは，KPD等とは全く違う立場をとり，激しく対立したのである。とくに，よく言及されるのは，以下の２つの問題である。第１に，労働者の利害代表組織として相応しいのは，「協議会か労働組合か」という問題である。ディスマンは，第一次大戦直後は，（経営）協議会組織（レーテ制度）を認め，それに好意的な評価を与えていた[13]。だが，直後にそれを強く否定している。また第２に，コミンテルン（第３インターナショナル）加盟問題である。1920年半ばにコミンテルンから突き付けられた「21か条の加盟条件」は，労組あるいは社会主義政党に，モスクワへの服従を強いるものであった。デ

11）例えば，Borsdorf, U., *Hans Böckler : Arbeit und Leben eines Gewerkschafters von 1875 bis 1945*, Köln 1982, S. 160–64等を参照。このボルスドルフの著は，ドイツの第二次大戦後のナショナルセンター，DGBの初代委員長であったハンス・ベックラーの財団から出版された彼の伝記である。従って内容は慎重に吟味すべきだが，ベックラー自身がフランクフルト出身のDMV組合員ということで，ディスマンに関する記述の多いDMV史の如きものとなっている。

12）わが国においても，カウツキー，ヒルファディングに関する研究は枚挙に暇がないし，USPD研究も少なくない。それらをご専門とされる方々の御名前のみあげさせていただければ，相田愼一氏，河野裕康氏，倉田稔氏等が代表的であると思われる。諸先生のお仕事をはじめとした日本における関連した研究の多くに目を通したが，ディスマンについてはほとんど言及されることはなく，ほんの数度，ただ触れられるという形で登場するのみであった。河野裕康『ヒルファディングの経済政策思想』法政大学出版局，1993年，148頁等を参照。他方，労働運動史研究においては，相馬保夫氏による第一次大戦中あるいは革命期の研究に，ディスマンの名が見受けられた（相馬保夫「ドイツ革命期における労働組合と経営協議会―ベルリン金属工の場合」『大原社会問題研究所雑誌』353号，1988年４月，12，14，19頁）。逆に国外の研究では，本稿で見るように，ディスマンの政党人としての側面に注目が集まっているように思われる。なお，山田徹『ヴァイマル共和国初期のドイツ共産党』（お茶の水書房，1997年）でも，わずかであるがディスマンが登場する。本書で触れられる23年のルール闘争において，ディスマンは一定の役割を果たしている。この点の検討は別の機会を用意したいが，さしあたり，Ruck, M., *Die freien Gewerkschaften im Ruhrkampf 1923*, Köln 1986を参照されたい。

13）*Protokoll über die Verhandlungen des außerordentlichen Parteitages vom 2. bis 6. März 1919 in Berlin*, S. 191–97.

ィスマンは，ヒルファディングらと共にこれに頑強に反対し，結果として当時彼らが所属していたUSPDの左右両派の対立は決定的となる。左派はUSPDから離脱し，KPDへと合流したのであった。上記２つの問題は，KPD等の極左派にとっては本質的に重要な問題であった。以下で見るように，ディスマンは，第一次大戦中，SPD指導部および自由労働組合指導部批判の先頭に立ち，一般的に左派と目されていた。そうした彼の，これらの問題への対応が，KPD党員等から見れば，上記の罵声の一つにも見られるように，「変節」と映ったように思われる。「変節者」が，もとより敵であった者以上に強く批判されるのは，世の常である。KPDの影響が強い東ドイツの研究において，ディスマンは，侮蔑を込めて「修正主義者」とまで見なされており，次のような評価を受けた。「彼の首尾一貫しない，矛盾だらけの態度は，DMVにおける革命的な労働組合政策の貫徹を妨げることに大いに貢献した」[14]。

だが，「変節者」が，当時世界最大の単位組合，DMVの代表になることなど可能であろうか。ディスマンをDMV代表の座から引き摺り下ろしたのは，1926年のその死であった[15]。1919年から1926年までの間，彼は常に80万人を越える金属労働者の頂点にあったのである。すなわち，同時代的には一定の支持を受けていた，労働組合の指導者であったことは紛れもない事実である。さらに言えば，1913年大会における自由労働組合の指導部選挙でも一定の票を集めており，1919年のUSPD代表選挙でも第３位の票数を得ているのである。

以上をふまえ，本稿は，ディスマンの生涯を詳細に紹介することを第一の課題とする。その際，政治家としての歩みおよび労働組合員としての歩みを，可能な限り切り分け跡づけつつ，双方を対比させながら，彼は「変節者」であったのか，あるいは生涯を貫く何がしかの信念のごときものをもっていたのか，という点を中心に検討して，ディスマンの再評価の手掛かりを得たい。以上の課題およびディスマンの生涯の全体像がこれまでほとんど論じられてこなかったという研究状況に基づけば，本稿においては，どうしても伝記的な記述に紙幅の大半を割かざるをえない。従って，本稿の考案を通じて見いだされた諸論点の詳細な検討には，別の機会を用意するほかないことを予めお断りしておきたい。

Ⅱ　1878年の誕生から1919年10月 DMV 代表就任までの過程

まず，ディスマンがDMVの指導者となるまでの足取りを概観することにする[16]。

---

14) *Biographisches Lexikon*, S. 94–95.

15) *100 Jahre Industriegewerkschaft*, S. 122.

16) ディスマンの経歴などについての記述は，以下をとくに参照した。*Metallarbeiter-Zeitung*（週刊のDMV機関紙），13. 11. 1926, Nr. 46, S. 200 ; Levi, a. a. O., S. 1 ; Krause, *a. a. O.*, S. 353–54 ; Morgan, *op. cit.*, pp. 59–60, 459 ; Opel, *a. a. O.*; Prager, E., *Das Gebot der Stunde : Geschichte der USPD,* Berlin 1980 ; Borsdorf, *a. a. O.*; Engelmann, D., “Vor 75 Jahren : Annäherung und Wiedervereining von SPD und USPD 1920–1922”, in : *Beiträge zur Geschichte der Arbei-*

ディスマンは，1878年８月８日，プロイセンのラインラント州，現在のノルトライン・ヴェストファーレン州の南部に位置する，グンマースバッハ（という都）市のヒュルゼンブッシュ(Hülsenbusch）なる村落で，労働者の子として生まれた。当地において，国民学校に通い，旋盤工としての技術を身に付けた。10代の彼は，利発でユーモアのセンスにあふれていたとの記述が残っている。ディスマンは，1897年，20歳になる直前，SPD に入党し，ほぼ期を同じくしてドイツ金属労働者組合（DMV）に加入している。以降ディスマンは，一方では政党人として，他方では労働組合員として，キャリアを重ねていくことになる。以下では，彼の生涯をより正確に理解するために，２つの歩みをそれぞれ跡づけることしたい。

１　政党人ディスマン

まず政党人としての歩みである。1897年の SPD 入党以降，1908年（30歳）から1912年（34歳）まで，フランクフルト・アム・マイン（以下，フランクフルト）近郊のハーナウという都市で，SPD の第一書記に任ぜられた。1912–1917年（39歳）には，フランクフルトを中心としたプロイセンのヘッセン－ナッサウ地区の第一書記を務めた。

ディスマンが，代議員として初めて参加した SPD の全国大会は，1906年マンハイム大会である。同大会と1910年マグデブルク大会においては，ローザ・ルクセンブルクの大衆ストに関する提案への支持を強く打ち出した。これ以降，SPD における左派的な立場がより明確となっていく。1909–13年においては，すべての党全国大会に代議員として出席し，改良主義的な立場をとる指導部を幾度となく批判した。例えば，1911年イェーナ大会では，指導部の独断的な姿勢を槍玉にあげている[17]。そして1913年大会では，党代表に継ぐ地位にある書記のポストに，党内左派の代表者として立候補した。指導部の方針に対する批判に加え，SPD と自由労働組合の密接な協力関係の構築を訴え，指導部入りを目指したのである。結果は，立候補した８候補中，得票数最下位での落選であった[18]。だが，現指導部側の改良主義的立場の者たちが大半を占める立候補者の中で，一定の票を集めたことは評価されるべきであり，ディスマンが左派の中で多くの支持を集めていたことを示すものである。なおクラウゼによれば，1908–12年にはハーナウにおいて，またそれ以降1917年まではフランクフルトにおいて，市会議員としても活躍したという[19]。

---

terbewegung, Berlin 1997, S. 28–42 ; Hoffmann, Simon, a. a. O., S. 106–21.

17) *Protokoll über die Verhandlungen des Parteitages der sozialdemokratischen Partei Deutschlands Abgehalten in Jena vom 10. bis 16. September 1911*, S. 233. 翌12年ハーナウ大会でも発言している。

18) *Protokoll des Parteitages der SPD 1913*, S. 253, 549. 満票が473票で211票を獲得した。269票であった第７位の候補者以外は全て400票以上を得ている。後に首相となるシャイデマン（Philipp Scheidemann）等が対立候補であった。

19) Krause, *a. a. O.*, S. 353.

第一次大戦の勃発は，ディスマンの人生の転機となった。大戦中開催されたSPD 1916年ベルリン大会では，戦争反対派のスポークスマンとして指導部を激しく批判した[20]。そして，1917年４月，SPDの戦争反対派により構成されるUSPDに，創立メンバーの一人として参加する。創立大会において，中央委員会（執行部）の活動に対し助言，監視を行う，顧問会のメンバーに選出されると同時に，USPDフランクフルト支部の代表となり，17–19年は，西南ドイツ一帯のUSPD組織を統括する第一書記を務めた[21]。以降，19年３–11月の約８か月間以外の全期，USPD消滅まで顧問会のメンバーであり続けることになる。つまりUSPDでは，一貫して一定の影響力をもつ立場にあったといえる。「８か月間」の理由の一つは，以下でみるように，この時期に激動を極めた，労働組合員としての活動に専念するためであったと考えるべきであろう。ディスマンは，USPDへの参加後，当然のごとくSPDからは除名処分を受けた。

なお1918年11月の革命時，ディスマンはフランクフルトにいた。すでに革命の勃発を予見しており，同年夏頃から，信頼のおけるDMV組合員とりわけ自分と同じ旋盤工を，職場委員として当地の重要な事業所に配置し，革命のためのネットワークを構築していたのである。11月８日，前日のベルリンにおけるリヒャルト・ミュラー（Richard Müller）ら革命的オプロイテとの会合から戻ったディスマンは，レストラン「シュレージエンの角」に職場委員達を集め，ゼネストの実行方法について演説を行った。その後，彼は兵舎に向かい，労・兵協議会の運動を統合することに成功したのである。翌９日，多くの建物に赤旗が掲げられた。ディスマンはフランクフルトにおける革命の原動力であり，それを成功に導いたのであった[22]。

1919年３月，創立大会以来２度目のUSPD大会が開催された。平時に開催された初の大会であり，党代表選挙が行われた。ディスマンは第３位となった。結党以来の指導者で党内右派のハーゼ（Hugo Haase）が154票，左派の指導者で革命的オプロイテのメンバーであるドイミヒが109票，ディスマンが59票，クリスピーン（Artur Crispien）が８票，ディットマン（Wilhelm Dittmann）が４票であった（満票は173票）。代表は２名選出されることになっていたが，ハーゼがあまりに立場が異なるドイミヒと一緒に代表を務めることを拒否したため（ドイミヒも同意），第３位のディスマンを共同代表に押す動きも見られた。だがディスマンは，代表選挙への立候補自体が，支持者に促された厳しい選択であったことを告白し，地元のために働きたいゆえ，「再立候補を拒否したい」[23]と訴えた。フランクフルトでは，ディスマンに

---

20) *Protokoll der Reichskonferenz, Der Sozialdemokratie Deutschlands vom 21., 22. und 23. September 1916 in Berlin*, S. 34–35.

21) モーガンによれば，1917年から19年初頭までは労組関連の仕事から離れていたという。

22) Hoffmann, Simon, a. a. O., S. 110–11 ; Cronin, J., “Labor Insurgency and Class Formation”, *Social Science History*, Vol. 4, No. 1, February 1980, p. 132.

23) *Protokoll über die Verhandlungen des außerordentlichen Parteitages vom 2. bis 6. März 1919 in Berlin*, S. 254–55.

多くの要望・苦情が寄せられる。それに対応するために「私は地域に残りたい」と言うのであった。結果，８票ながら，第４位であったクリスピーンが共同代表におさまることとなった。この選挙結果に従えば，ディスマンは，USPD 内部でもかなり多くの支持を集めた指導者の一人といってよいと思われる。この大会で，ディスマンは「労働組合に対する USPD の態度」という題目で演説を行った。この演説の内容については，すでに指摘したように，とりわけディスマンが協議会組織に一定の好意的な態度を表明した点が強調されてきたが，同時に彼は，現存する労働組合の有効性を主張し，USPD 独自の労働者組織を新たに作ることには，明確に反対している[24]。この点を確認し，労働組合員として歩みをみることにしよう。

２　労働組合員ディスマン

ディスマンは，1900年22歳の時，すでに DMV の専従職員になっており，バルメン－エルバーフェルト（Barmen-Elberfeld）地域において，DMV 大会への全権代表に選出されている。また1905-08年は，DMV のフランクフルト支部に勤務し，所属組合員約１万人の全権代表に選出されるなど，着実にその地位を上昇させていった。

ディスマンが，DMV の上部団体である自由労働組合の大会にはじめて参加したのは，1902年６月16-21日に開催された第４回シュトゥットガルト大会のことであった。同大会ですでに，後の彼の立場が窺える。総務委員会委員長カール・レギーン（Carl Legien）は，この時すでに自由労働組合の指導者としての地位を確固たるものにしていた。レギーンは労組を政治的闘争から遠ざけることを主張していたのだが，まだ若輩者であったディスマンが，それを強く批判したのである[25]。以来，この若者は，自由労働組合における左翼勢力の非常に活動的な先駆者となる。以下で見るように，労働者の生活の向上という目的のためであれば，使用者や国家と協力することも辞さないという立場をとるレギーンにとって，天敵ともいうべき存在となるのである。自由労働組合1908年大会では，またもレギーンとの論戦となる。ディスマンは，まず総務委員会の活動を非難した上で，闘争とりわけ援助金に関する自律性を単位組合に与えるべきだと主張した。さらには，それに関連する SPD と自由労働組合との間の取り決めの内容を厳しく批判したのであった[26]。第一次大戦前の時期は，次の1910年大会以降の自由労働組合大会で目立った活躍はなかった。この時期のディスマンは，前節でみた通り，むしろ政党人あるいは地方議員としての活動に重心をおいていたようである[27]。

---

24) *Ebenda*, S. 191-97.

25) *Protokoll der Verhandlungen des vierten Kongresses der Gewerkschaften Deutschlands Abgehalten zu Stuttgart im Gewerkschaftshause vom 16. bis 21. Juni 1902*, S. 129.

26) *Protokoll der Verhandlungen des sechsten Kongresses der Gewerkschaften Deutschlands Abgehalten zu Hamburg vom 22. bis 27. Juni 1908*, S. 185, 198, 274.

27) 1910年，11年，14年の自由労働組合全国大会には参加していないようである。

労働組合員としてのディスマンにとっても，第一次大戦は転機となった。開戦直後より，労働組合員の間で反対派を形成し，その中心人物となる。反対派が目に見える形で現れたのは，17年６–７月の DMV 大会であった[28]。同大会でディスマンは，労働組合内反対派の代表者として，1895年以来，一貫して DMV の代表であり，総務委員会の主導する戦争協力政策を支持する，アレクサンダー・シュリケ（Alexander Schlicke）[29] を激しく批判した。シュリケの主張する，労組組織の維持・拡大のための戦争協力という，ある意味での現実的な選択に，プロレタリア階級闘争という労働組合運動の基本を対置したのである。SPD と歩調を合わせ戦争協力を続け，こうした「本来の基本」を捨て去るのであれば，労働組合の政治的利害代表を，SPD ではなく USPD とするとまで主張したのであった。こうしたディスマンの主張に基づく提案は，73対44で否決された。理由は，総務委員会の代表として出席していたレギーンの反論にあった。彼は，ディスマンらの主張が単なる理想論であり，なんら現実に対応した展望を示していない点を批判したのであった。だが記名投票においてこれだけの支持を得たこと，加えて代表選挙において白票が全投票の30％を占めたことは，反対派が DMV において確固たる地位を築いたことを内外に知らしめるには十分であった。このとき，労組の政治的利害代表のオルタナティブ，USPD が存在しており，ディスマンをはじめ多くの DMV 組合員がそれに参加していたのである。このように DMV において，改良主義的な指導部の地位が揺らぐ中，大戦は終結に向かう。

第一次大戦の敗戦後，初の大会として，1919年７月に自由労働組合ニュルンベルク大会[30]，同年10月に DMV シュトゥットガルト大会が連続して開催された。双方の大会においてディスマンは，それぞれの指導部に対する不支持という点では共通するが，社会主義実現に向けた展望，現状把握等については多様な立場の者たちで構成される反対派の代表者として，熱弁を振るった。おそらく1919年の２つの大会は，彼の人生の中で，よい意味でのハイライトであった。ディスマンは両大会において共通した主張を提示した。大きくは以下の３点にまとめられる。まず，戦争に協力した当時の労組指導部に，戦争責任があるか否か，という点である。ディスマンは，自由労働組合大会においては，レギーンら総務委員会を「ドイツを戦争に駆り立てた者たち」とし，軍や内閣と同等の責任があると糾弾したのであった。過酷な「ベルサイユ

28）*Metallarbeiter-Zeitung*, 7. 7. 1917, Nr. 27, S. 113–16. 相馬「第一次世界大戦期のドイツ自由労働組合」『歴史学研究』No. 487, 1980年12月，13–14頁。

29）シュリケは，ディスマンと同じくフランクフルト出身で，1891年の DMV 創立時より指導部の一員（書記）であった。中央労働共同体の推進者の一人で，労働大臣にもなる。このため左派から批判されることが多かった。産業別組合原則の支持者でもあった。代表選挙については，*Metallarbeiter-Zeitung*, 14. 7. 1917, Nr. 28, S. 118 を参照。

30）自由労働組合19年大会におけるディスマンの発言は，*Protokoll der Verhandlungen des zehnten Kongresses der Gewerkschaften Deutschlands Abgehalten zu Nürnberg vom 30. Juni bis 5. Juli 1919*, S. 327–42, 382–98, 403–10, 499–502, 512, 522, 583–84より。

条約は…彼の悪業に対する報いである」。さらに，総務委員会の戦争協力政策は，ディスマン自身も含む反対派を生み出し，労働組合運動を分裂させたという罪もあった。従って，革命における労働者階級の敗北の責任も，彼等が負うべきだと主張したのである。また，DMV 大会においては，「1918年11月まで，すべての犯罪者を援助してきた勢力，フラクションそして政党は，戦争に対して彼等と同様の責任がある」というテーゼを提示し，数分間の喝采を浴びたのであった[31]。第２に，社会主義革命を回避すべく，使用者と労働組合との間に安定的・協調的な労使関係を構築することを目的とした，労働共同体政策に関してである。中央労働共同体として具現されるこの政策を，ディスマンは「忌まわしいもの」であるとし[32]，真っ向から拒否した。第３に，革命を主導した協議会組織およびそれと労働組合の関係についてである。ディスマンは DMV 大会で以下のように述べている。「我々の国民経済の再建は，社会主義的なものでなければならない。まずこのことを根底に置き，DMV の政策と立場を，革命的階級闘争と協議会制度という基礎に立脚させ，徹底して調整すべきである。プロレタリアの闘争を確実な社会主義の勝利へと導くために。そして世界的な革命の勝利にたどり着くために」[33]。すなわち協議会組織に好意的な態度を示したのであった。以上の３つの主張，とりわけ第１の主張により，ディスマンは，労働組合における反対派，USPD 党員から，場合によっては創立されたばかりの KPD の党員からも，大きな支持を得たように思われる。これが，ディスマンを DMV 代表へと押し上げた背景にあることは疑いない。

以上のディスマンの主張に対し，２つの大会は全く異なる結果を示した。自由労働組合大会では激論の末，同盟指導部＝総務委員会の方針が，445対179で信任された[34]。自由労働組合では，依然改良主義者たちが主導権を握り，労働共同体政策も承認されたのであった。逆に，DMV 大会では，シュリケが，ディスマンらの見解に対する採決を待たずに，大会会場を去りベルリンに帰ってしまった。結果はあきらかだからである[35]。自由労働組合1919年大会に派遣された DMV の代議員119名中，65名が労働組合内反対派であった。DMV 大会においては反対派が過半数を占めていた。ここに DMV における労働組合内反対派そして USPD の主導権が確立したのであった。DMV は労働共同体政策に明確に拒否を示した。そして，ディスマンはついに，シュリケからその代表の座を奪うことになったのである。彼は，代表選挙でほぼ満票の183票，最高得票を得たのであった[36]。敗戦直後の重要な２つの大会において，総務委員

31) Borsdorf, *a. a. O.*, S. 156 ; *Metallarbeiter-Zeitung*, 1. 11. 1919, Nr. 44, S. 172–73. この主張をめぐる議論は，*ebenda*, S. 173–75を参照。

32) *Ebenda*, S. 178. 後者２つについては，19年３月の USPD 臨時大会でも主張された。

33) *Ebenda*, S. 177–78. これらの主張は，DMV 大会では，194対129で採択された。

34) *Protokoll der Verhandlungen des zehnten Kongresses der Gewerkschaften Deutschlands Abgehalten zu Nürnberg vom 30. Juni bis 5. Juli 1919*, S. 404–405.

35) Borsdorf, *a. a. O.*, S. 157.

36) Högl, G., *Gewerkschaften und USPD von 1916–1922 : ein Beitrag zur Geschichte der deut-*

会批判，DMV 指導部批判の先頭に立ったことを考えれば，当然といえた。ディスマンは，数多いる労組内左派の論客の中でも，少なくともスポークスマンあるいはアジテイターとして，高く評価されていたと考えてよいと思われる。このとき DMV は，組合員数約160万人，「世界最強の労働組合」であり，レギーンらを中心とする自由労働組合指導部に対する反対派の最大の牙城となった。ディスマンはその頂点に立った。

Ⅲ　1919年から1926年の展開過程

第一次大戦を契機に，ディスマンの役割は，政党，労組双方において著しく重要なものとなった。また，その敗戦は，ディスマンを取り巻く状況を大きく変えた。DMV を含む全単位組合が，使用者に労働協約当事者として承認され，SPD は政権の一翼を担うようになり，戦争反対という一点で多様な立場の元 SPD 党員を糾合していた USPD は，その存在理由を失いつつあった。DMV 1919年大会においてディスマンを支持した労働組合内反対派そして USPD 党員は，内部対立を深めることとなる。以下，１，３は政党人としての，２，４は DMV 指導者としての記述が中心となる。

１　USPD の分裂

ディスマンと共に，DMV19年大会で反対派を主導したリヒャルト・ミュラーは[37]，革命的オプロイテ・USPD 左派の指導者の一人であり，労組ではなく協議会を，労働者の利害代表組織として相応しいとする立場をとっていた。彼とディスマンは，この DMV1919年10月大会直後，11–12月に開催された USPD ライプチヒ大会において，労組と政党の関係，いわゆる「労働組合問題」を巡り，決定的に袂を分かつことになる。ディスマンは，同大会で「労働組合の統一を脅かす，すべての傾向に断固たる拒否」を与えたのであった[38]。ディスマンら

---

schen Arbeiterbewegung unter besonderer Berucksichtigung des Deutschen Metallarbeiter-, Textilarbeiter-und Schuhmacherverbandes, München 1982, S. 219, 227–28, 241–42.

37) リヒャルト・ミュラーは，1880年生まれで DMV 内反対派の指導者の一人。1918年11月革命，自由労働組合19年大会，DMV19年大会ではディスマンと共闘し，DMV 機関紙の編集長の地位を得た。Borsdorf, *a. a. O.*, S. 160. だが即時の革命を可能とみるなど，状況の把握においてもディスマンの立場とは大差があった。死亡時期は不明だが，資料が残されているということもあり，第一次大戦中から DMV ベルリン支部そして DMV 内部の極左派，革命的オプロイテの指導者として，よく知られている。自由労働組合19年大会においては，反対派に担がれレギーンの対立候補として指導部委員長に立候補した。だが，600票中，レギーンが428票，ミュラーが168票で敗退した。*Protokoll der Verhandlungen des zehnten Kongresses der Gewerkschaften Deutschlands, Abgehalten zu Nürnberg vom 30. Juni bis 5. Juli 1919*, S. 554–55.

38) *Protokoll über die Verhandlungen des außerordentlichen Parteitages in Leipzig vom 30. November bis 6. Dezember 1919*, S. 22–23, 50, 436–440.こうした対立の傾向は，すでに19年３月

USPD 右派の労働組合政策は，労組を労働者の利害代表組織とするという点で，もとよりUSPD 左派よりも SPD 等の右派に近かったのである。だが，USPD 左派は，ディスマンの態度を，わずか数か月で協議会組織を否定した背信行為として厳しく批判した。ディスマンに対する批判はこれにとどまらなかった。USPD19年11月大会では，コミンテルン加盟問題も討議され，大多数が加盟を支持した。だが，ディスマンはそれに反対する勢力の中心となり，コミンテルンへの加盟に応じるのなら，USPD からの離脱も辞さないと主張したのである。USPD 左派のクルト・ガイアーは，この時のことを以下のように綴っている。「彼［ディスマン］には激しい敵意があった。そして今彼は，長い間一緒にやってきた私と私の友人達に，公然と党の分裂という脅しをもって立ち向かってきたのである」[39]（［ ］内は筆者の補足。以下同様）。

だが，ディスマンにとっては，「加盟」を断固拒絶する正当な理由があったのである。1920年半ば，コミンテルン指導部は，各国の社会主義政党の右派指導者の排除を企図し，「21か条の加盟条件」を提示した[40]。これについては多くの研究があるので内容には立ち入らないが，ディスマンがとくに拒絶反応を示したのは，労組内に党の細胞を形成することを要求した第９条，新たな労働組合インターナショナルの創設を要求した第10条である。すなわちこれらは，現在ある労働組合の統一・自律性を脅かすものにほかならなかったのである。

1920年２月，国会で経営協議会法が決議された。同法は，協議会に自律性をほとんど認めない内容であり，USPD 左派を憤激させた。ミュラーは，独自に経営協議会中枢という，事業所ごとに設置される協議会を統合する機関を構想したが，ほとんど効果はなかった。そうした状況下，1920年10月に第１回経営協議会全国大会が開催された。その場でディスマンは，経営協議会を統合し，労組とは別の労働者の利害代表組織を作ろうとするミュラーらを批判し，労働者には「労働組合という肥沃な土地を離れるな」と訴えた。そして「労組は，労働者階級の経済的な［利害を代表する］唯一の闘争組織」であり，「経営協議会は，生産の現場における労組の代理」であると，両者の関係を明確に定義したのである[41]。この主張は『経営協議会の

の前回大会より見受けられた。

39) Geyer, C., *Die revolutionäre Illusion : zur Geschichte des linken Flügels der USPD*, Stuttgart 1976, S. 156–58. クルト・ガイアーは，USPD 左派の幹部の一人。1920年の分裂後 KPD に加入。レヴィを慕いその後常に行動を共にした。レヴィを追う形で22年４月 USPD に復帰，SPD への再合流にも加わった。本著は死直前に編まれた回想録であり，当事者ならではの記述も豊富で，その後の USPD 研究に大きな影響を与えたと思われる。上記のような遍歴をもつ彼が，こうした著においてディスマンを批判的に描いていることも，ディスマンに対する低い評価の一因と考えざるをえない。ディスマンと近い考えを持つレヴィを擁護する一方で，ディスマンとは個人的に仲が悪かったとも明確に記している。

40)「21か条」については山田，前掲書，27–31頁等を参照。ディスマンは DMV 21年大会においてもこの２条項を激しく批判した。

41) *Protokoll der Verhandlungen des Ersten Reichskongresses der Betriebsräte Deutschlands : abgehalten vom 5.–7. Oktober 1920 zu Berlin*, S. 68–69, 195, 197–99, 264–65.

使命とその組織的統合』[42] と題した小冊子にもなった。

ほぼ同時期に開催された1920年10月の USPD ハレ大会は，上記のような状況から，ある意味では必然的に「分裂大会」となった。コミンテルン加盟問題については，19年11月大会と同様の構図となった。左派が優勢であり，395対237で加盟が可決されたが，ディスマン，ヒルファディングらは再び党の分裂を持ち出した。以下，ほんの１年前，DMV19年大会において，協力して SPD 勢力から主導権を奪った両雄の論戦である。まずミュラーである。「このような内部矛盾を許容する党，このような酷い党員間の言い争いを許容する党，朽ち果ててぼろぼろで粉々に壊れた党（右派からの爆笑)。…だがこんな党でもプロレタリアの旗手にだけはなれるはずである。その活動の原動力にだけはなれるはずである。大会決議に対し公然と反対する同志達を容赦なく追放するのであれば（全く正しいとの声。会場は騒然とする)」。直後にディスマンが右派を代表して反論した。「現在，党指導部は…ばらばらの状態である。私は明言しよう，今こそが，それぞれの道を進むのに最適な時期である，と（全く正しい！激しい同意)。そして今後もずっとそうすべきである。なぜなら，ここでは［両勢力の］協力的な活動についてなど全く話し合われていない。むしろ，ここには連帯感の代わりに不信のみが存在しているからである（激しいヤジ)」[43]。最早感情的とさえいえる深い亀裂が存在した。分裂は，両派が共に望んだ結果であった。大会会場を後にしたのは右派である。だが，左派の方が USPD から離脱し，２か月後，KPD に合流することになる。大会後，左派は声明を出した。「大会決議に従おうとしない右派グループは，USPD における統一戦線を引き裂くために大会を去った。すなわち第一次大戦中に右派社会主義者エーベルト（Friedrich Ebert）［SPD 党首→ドイツ初代大統領］一派により行われたプロレタリアに対する犯罪［戦争反対派の追放→USPD 創立に追い込む］が，今日ここで，ヒルファディング，ディスマン，クリスピーン［当時の USPD 共同代表］により繰り返されたのである」[44]。

以上のように，ディスマンは，コミンテルン加盟問題および「労働組合問題」により，USPD 左派，KPD からみれば，プロレタリアの統一戦線を引き裂く，憎むべき修正主義者と同列に

---

42) Dißmann, R., *Die Aufgaben der Betriebsräte und deren organisatorische Zusammenfassung : Referat, gehalten auf dem Reichskongress der Betriebsräte in Berlin am 7. Oktober 1920*, Frankfurt a. M. 1920. とくに S. 17–20を参照。ディスマンは著作というべきものは残していないが，いくつかの小冊子，また機関紙などに数多くの論説を残している。例えば，Dißmann, *Für Industrieverbände referat von Robert Dißmann : auf dem 11. deutschen Gewerkschaftskongress in Leipzig am 23. Juni 1922* (*nebst der vom Kongress angenommenen Entschliessung*), Frankfurt a. M. 1922. 産業別組合への再編成案を掲載したものである。レヴィによれば，とにかく少しでも時間があれば，どんな場所でもタイプライターを打ち，書類を書いていたという。Levi, a. a. O., S. 1.

43) ミュラー発言は，*Protokoll über die Verhandlungen des außerordentlichen Parteitages in Halle vom 12. bis 17. October 1920*, S. 35, ディスマン発言は，*ebenda*, S. 40より。

44) *Ebenda*［*Link USPD*］, S. 267–68.

扱うべきUSPD右派の中心人物として，まず名指しで批判される攻撃対象となった。本稿冒頭に記した極左派からのディスマンに対する罵詈雑言は，この時期以降，激しさを増すことになる。だが，この２つの問題は，「変節者」ディスマンを証明するというよりも，USPD左派の考え方とディスマンのそれとの間に決定的な違いがあることを示すものであった。以上から明確となったディスマンの立場は，労働組合以外のあらゆる利害代表を認めない，そしてその分裂あるいは自律性を脅かすものを絶対に認めない，というものであった。この点は，以下でみるDMV内部での言動によっても裏付けられる。

２　DMV 統一の維持

KPDの主張によれば，1920年末頃から，自由労働組合の各単位組合において，KPD党員の除名，大会から締め出しが頻発したという。その動きを主導している黒幕がディスマンだというのである[45]。鉱山業や建設業の労組でそうした動きがあったことは事実である。ではDMVにおけるディスマンとKPD勢力との関係はいかなるものであったのか。これまでは，ディスマンが，ベルリンのKPD党員を「要求のためにサボタージュを犯す…無責任な者」と批判した，21年１月発行の小冊子[46]等を根拠に，対立的な局面が強調されてきた。

DMV19年大会において，ディスマンと共に代表となった二名のうち，ブランデス（Alwin Brandes）はUSPD党員であり，比較的ディスマンと近い立場の者であった。だが，もう一人の代表ライヒェル（Georg Reichel）は，シュリケ直系のSPD党員である。彼が代表となったのは，DMV内部の融和あるいは組織の統一の維持のためである。シュリケが約25年間も代表を務めたDMVは，他の組合に比して反対派が多いものの，とくに幹部には改良主義的な立場の者も少なくなかったからである。敗戦から時が経つに連れ，DMV内部で，SPD党員が多くを占めるようになっていく。1921年９月のDMVイェーナ大会では，SPD等右派が絶対多数の412議席を有し，USPDが254，KPDが114という情勢であり[47]，ディスマンの地位は不安定なものといわざるをえなかった。

ボルスドルフは，当時のDMV指導部が，「インフレ，失業，使用者の攻撃に対抗しうる明確な構想を全く開発していなかった」とし，「それに取り組む代わりに，19年の争いを蒸し返し…イデオロギー的な論争に没頭していた」[48]とする。すなわち，21年頃のDMVでは，平時

45) *Dokumente und Materialien*, Bd. 7, 1. Halbb., S. 417–19.

46) Dißmann, *Gegenwartsaufgaben der Gewerkschaften und die “５ Stuttgarter Forderungen” der “Offene Brief der V. K. P. D.”*, Stuttgart 1921. とくにS. 28–31を参照。

47) Borsdorf, *a. a. O.*, S. 178. DMV1921年大会における状況，ディスマンの発言・見解は，*ebenda*, S.179–82 ; *Metallarbeiter-Zeitung*, 24. 9. 1921, Nr. 39, S. 201–203 ; 1. 10. 1921, Nr. 40, S. 205–12 ; Hoffmann, Simon, a. a. O., S. 117–18より。

48) ボルスドルフの見解は，Borsdorf, *a. a. O.*, S. 180より。ホフマンらは，ディスマンがDMV21年大会では左右両派から激しい攻撃を受けたとしている。Hoffmann, Simon, a. a. O., S. 117.

の状況への対応がなおざりにされる一方で，上記のごとき激烈な USPD 両派の対立をほぼそのまま反映する形で，イデオロギー的な対立がみられたというのである。

KPD の労働組合への対策は，労組を政治的に動員し，ゼネスト等を手段として，即座の社会主義体制の実現を目指すというものであった。ディスマンは，これを一貫して厳しく批判した。彼にとってゼネストは，どんな形であれ経済の危機，失業，操業停止等の観点からして「無責任」なものであった。ディスマンは，増大する失業を「資本主義体制の存続と不可分の問題」であるとして，将来の社会主義への展望を示す。だが，それは，KPD が主張する「大衆行動では決して実現しない」。そして，現在行うべきは，「社会主義の（根本）思想を常に維持し，普及させつつ，目下の［状況とくに］失業という困難に対応すること」であると主張したのである。こうした点は『小冊子』と共通する。まさに「中央派」的かつ現実的な対応といえた。ボルスドルフは，「この労働組合的な修正主義への支持表明をもって」，KPD との対立，そして SPD への復帰が決定的となったと見る。こうした，この時期のディスマンと KPD の険悪な関係を強調する見方は少なくない。事実，21年大会において，右派ハース（August Haas）は，上記のようなディスマンの見解を，シュリケと全く同一線上にあるものとして歓迎したのであった。

確かに，21年大会におけるディスマンの主張は，資本主義体制内での労組の力の極大化を企図するものであった。敗戦後数年が経過したこの時期，使用者は巻き返しを図り，インフレもあって，DMV は協約交渉において必ずしも労働者の生活状況を向上させることに成功していなかった。ディスマンの対策はこうである。「使用者と対峙する闘争において，プロレタリアが存分に力を発揮するためには，全プロレタリアの力を統合するほかない」。そのための「事前の協議さえうまくいけば」，プロレタリアを勝利へと導くことができる。すなわちディスマンは，使用者に対峙するために，労働組合における統一の維持を，とにかく主張したのである。だが，彼は，DMV 内部の分裂とりわけ党派的分裂に危機感を覚えていた。もし労働者階級の一部が分裂したままであるなら，「敵は容易に勝利を奪い」去り，「この先10年のドイツの労働者の［悲劇的な］運命が決定されるであろう」[49]。そして，「敵」を倒せるか否かは，間違いなく「我々の協力」次第である，と訴えたのであった。ディスマンは，この時自由労働組合全体を産業別組合へと再編成することを強く主張し，自由労働組合指導部や他の単位組合との間で論争を巻き起こしていた[50]。21年大会での発言から窺える，労組における分裂をとにかく回避しようとする彼の信念が，再編成の主張の根底にあったことは疑いない。

その一方でディスマンは，DMV 内部の KPD 党員には，次のように語りかけた。KPD 内

49）ホフマンらは，この発言を，労働組合運動の分裂がナチ台頭の要因となることを予見したものとして評価している。Ebenda, S. 118.

50）枡田「ワイマール期初期の自由労働組合における組織再編成問題―産業別組合か職業別組合か―」『立教経済学研究』第55巻第３号，2002年１月，103–26頁を参照。

には長い間共に力を合わせ闘ってきた多くの友人がいる。貴方がたが「たとえ共産主義政党に属しているとしても，排除するつもりなど毛頭ない」し，闘争の仲間として尊重する。「プロレタリアの勝利のためには，我々全員［の力］，すなわち貴方がた［の力］も必要なのです」。これに対し，DMV 内の KPD 党員のリーダー，ヤコブ・ヴァルヒャー（Jakob Walcher）は，「私は，シュリケにより操られてきた DMV という船は，ディスマン以外の者では制御できないと思う」。「我々はもはや他の者に顧慮せず，無分別に階級的な政策を要求することはない」として，ディスマンに一定の理解を示したのである[51]。

このようにして，内部に３つの勢力をかかえる DMV は，コミンテルン加盟問題等により政党が分裂したり，政党間の対立が激化する一方で，統一を維持することになったのである。ホフマンらは，DMV が分裂しなかった理由としてディスマンの意思の強さをあげている。ディスマンは，20年10月の USPD「分裂大会」前後から，DMV の分裂を押さえるため，会合から会合へと全国を飛び回ったのであった[52]。こうした下準備があったからこそ，**図１**に見るように，1920年10月の USPD 分裂は，DMV の分裂へとは繋がらなかったのである。ディスマンは，DMV21年大会の閉会の辞で次のように述べている。「私は，近い将来，はなむけの歌を歌うことができるのではないか，と期待している。それは決して，USPD に対するものでも，KPD に対するものでも，SPD に対するものでもない。ドイツのプロレタリアの内部分裂に対する追悼歌である」。

３　SPD への復帰

図１にあるように，1921年，ディスマンを含む右派，残留組からなる USPD の党員数は，USPD 左派を糾合した KPD とほぼ同じ水準にまで落ち込んだ。もとより，戦争反対という共通項でのみ，極左派から修正主義派までが結ばれていた USPD は，大戦の終結でその役割を終えたといえる。上記のように，大戦後の平時の構想，社会主義実現に向けた展望・方法等は，それぞれ異なるからである。逆に，少なくとも，労働者の経済的な利害代表を労組とするという点で，残留した USPD 右派と SPD との間に大差はなかった。当時の SPD 代表ヴェルス（Otto Wels）は，SPD22年大会でこう言っている。「我々と彼等［USPD］の間の差は，かつて一緒にやっていたときほど大きくはない」。会場からは「その通り！」との叫びが上がっ

51）大会直後12月に開催された DMV 全国経営協議会大会において，ディスマンは，賃金闘争が協議会の課題ではなく労組の任務であることを強調した案を提出した。DMV 組合員である KPD 党員はこれを支持した。*Erster Reichsbetriebsräte-Kongress für die Metallindustrie : abgehalten vom 5. bis 7. Dezember 1921 in Leipzig*, S. 105–20，132–54.

52）Hoffmann, Simon, a. a. O., S. 118.

53）*Protokoll der Sozialdemokratischen Parteitage in Augsburg, Gera und Nürnberg 1922*, S. 68–69.

た[53]。1922年９月，USPD と SPD は，それぞれ大会を招集し，再統合することとなる。正確な日程を記すと，まず SPD 大会が９月17–23日にアウグスブルクにおいて，USPD 大会が９月20–23日にゲーラにおいて，そして両党の統合大会が９月24日にニュルンベルクにおいて，開催されることになった。ディスマンは USPD 大会と統合大会に出席したが，統合大会では発言しなかった。以下 USPD 大会の様子を中心に見ることにする。

1922年１月の USPD 大会において，代表に選出されたディットマンとクリスピーンは，同年６月頃から SPD への合流を公言するようになった。この両名は，USPD 創立当時から，党内で重要な役割を担ってきた。だが，SPD への合流後，ディットマンは SPD の中央組織に幹部として勤務し「二度と左派と触れ合うことさえなかった」し，クリスピーンにいたっては，合流直後 SPD の共同代表に選出されている。すなわち両者にとり，当時の右派のみからなる USPD は，何の存在理由もなかったのである。こうした，まさに変節ともいうべき，動きを苦々しく思っていたのがディスマンであった。モーガンによれば，当時の USPD 党員の大半は，再統合には気が進まないが，かといって USPD を続けていくという強い信条はもたない者，であった[54]。このグループの中心がディスマンだったというのである。つまりこの時ディスマンは，はじめて USPD 内最大勢力のトップに立っていたわけである。

22年９月大会における SPD への合流に関する審議は，全く盛り上がりに欠ける暗い雰囲気であった。３名からなる代表の一人であったレーデブーア（Georg Ledebour）は「これは我々の信条の拒否であり，USPD の自殺である」と主張したが[55]，代議員達は全く聞いていなかった。彼は結局 SPD へは戻らず，わずか６名（国会議員２名）で USPD を名乗り続けることになる。

この審議で，わずかに盛り上がった瞬間を提供したのが，ディスマンとそのグループであった。というのも，彼等は，USPD 党員であった者が，その政治的な信条を曲げる事なく，(元) USPD の旗を掲げ，堂々と「信用できない党」SPD へと入っていくための筋道を明確に示したのである。現在 SPD において行われているブルジョワとの連携を拒否し，階級闘争をより強く推進することを SPD 内部で主張し，SPD を理想の形へと変えることが，元 USPD 党員の役割である。このように宣言したのである。すなわち，自分の歩んできた道，過去を決して否定することなく，SPD 内部で積極的な役割を果たすための論理を用意したのであった。勿論，それはディスマンがいうように「より強い自制心を伴」う，苦汁の選択であった。だが彼は続けた。「我々は毅然として SPD に入って行くのである」。そして，USPD のこれまでの政策を否定し，「無条件降伏」を主張するクリスピーンを激しく批判したのであった。

「信用できない党」SPD における，予想される同情的でない状況・不確かな将来に不安を抱

54) ディットマンらについては，Morgan, *op. cit.*, pp. 458–59,大会の状況等は，*ibid.*, pp. 436–37.

55) *Protokoll der Sozialdemokratischen Parteitage in Augsburg, Gera und Nürnberg 1922*, S. 146.

いていた代議員たちは，このディスマンらの提案に希望の光を見いだした。直後にSPDとの統合大会が控えており，こうした提案をすれば，SPDから再統合を拒否される可能性が出てくる。ディットマンら党幹部の警告にもかかわらず，当初106名の連名で提出されたディスマンらの提案に，最終的に122名が署名したのであった。ディスマンの「結びの言葉」に対しては，「ブラボー！」の叫びが繰り返された。だが，それは，議事録には決議ではなく「表明」として記されるにとどまった。そして，クリスピーンによる統合の提案は，反対わずか９票で採択されたのであった[56]。

以上のように，ディスマンは，元USPD党員が，SPDにおいて再結集する居場所を，論理的に準備したのである。事実，SPDに戻ったディスマンは，彼らを糾合し，党内反対派の中心人物として，一貫して指導部を批判し続けた。とくにブルジョワ勢力との妥協については完全に否定し，８時間労働制の維持等にも力を注いだのであった[57]。少なくともディスマンが亡くなる1926年頃までは，こうした反対派はSPD内で25～35%程を占めていたとされるが，その影響力はあえて制限された。とくに指導部のポストに，反対派のメンバーが就くことは決して認められなかったのである[58]。

こうしたUSPD（右派）のSPDへの復帰について，KPD中央指導部は，1922年９月28日以下のように述べている[59]。「USPDは政治的にも組織的にもSPDに無条件降伏した。[この時点の] USPD左派の指導者ディスマン」らは，ごたくを並べ反対してはいたが，結局「この歩みに参加した」。この「統合大会は，労働者階級の力の増大を全く意味しない。むしろ，ブルジョワとの連立政策の強化と，それによるブルジョワの勝利を意味する」。党員の多くは，ディスマンらによる，SPD内部で革命を起こすとの案に飛び付いたようだが，それは「幻想である」。事実，統合大会において，「熟達した右派与党［SPD指導部］の権力者達は，ディ

56）大会におけるディスマンの提案は，*ebenda*, S. 131–32, 157–60, 172,決議などはS. 173を参照。「レーデブーア…にとって，エーベルト，ノスケ（Gustav Noske），ヴェルス…といった人々と，同じテーブルにつくことは決してできなかった。ディスマン…といった者たちにとっても非常に厳しかったと考えられる」。Engelmann, a. a. O., S. 31.

57）*Biographisches Lexikon*, S. 95. だが1924年２月，KPDは，労働時間を巡る攻防に関する見解において，ディスマンを，シュティンネス，ジーメンス，クルップなどの大企業と同例に扱い，労働時間延長の権化として厳しく批判している。*Dokumente und Materialien*, Bd. 8, S. 41. 26年１月，ディスマンは，失業者や労働者の悲惨な生活状況の救済を目的に「貧困の犠牲者を援助せよ」と題した論説を発表した。それは，大企業，旧貴族等の金持ちが無条件で救済資金を提供すべきであり，さもなくば政治的な運動を起こすべきだと訴える内容であった。これに対し，KPDの指導者テールマン（Ernst Thälmann）は，「我々は，このディスマン言う内容全体について同意する」としている。*Ebenda*, S. 301–303. 一貫してSPD内部で指導層に反対してきた彼の行動が，KPD内部でも一定程度理解されたことの現われといえるのではないか。死の約半年前のことであった。

58）Morgan, *op. cit.*, p. 441.

59）「再統合」に対するKPDの見解は，*Dokumente und Materialien*, Bd. 7, 2. Halbb., S. 144–46より。

スマン…らのほんのわずかなそして臆病な抵抗の試みを全く無視し，粛々と議事を進行した」ではないか。こうした，半ば嘲笑さえを含む厳しい批判を示した上で，元 USPD 党員に，KPD への参加を呼び掛けたのであった。以上のようにディスマンは，右派 USPD 党員を救う SPD 復帰の正当化の論理を構築した。だが，それは KPD からさらに厳しい批判を受ける要因にもなった。

4　SPD 復帰後の DMV におけるディスマン

DMV 大会は２年ごとに開催されることとなっていた。上記のように21年大会を乗り切ったディスマンであったが，続く23年大会を前にして危機感を募らせていた。革命的気運の低下，労使対立の激化に伴い，賃金・労働条件等労働者の日常的な問題の重要度が増すに連れ，DMV に限らず全ての労働組合において，SPD 党員を中心とした改良主義勢力の比率が増大し，そうした勢力が，彼の地位を脅かしていたからである。ディスマンは22年９月に SPD に復党したのだが，指導部を激しく批判する党内反対派という立場は大戦以前と変わっていなかった。彼等の復党に対し SPD 内部では，単なる「左翼の強化」，「我々は再び強力な反対派を得てしまった」等，否定的な意見が少なくなかったのである[60]。

こうした状況の下，ディスマンは，DMV 内部において KPD 勢力に助力を求めた。その指導者，ヴァルヒャーは，DMV ベルリン支部の指導者の一人であり，KPD 中央指導部の労働組合運動の責任者でもあった。KPD の中では右派に属する彼は，とくに DMV1921年大会の頃からディスマンの立場に理解を示していた。自由労働組合22年大会において，ディスマンは，労働組合内反対派のスポークスマンとして，自由労働組合指導部の労働共同体政策を批判し，同時に自由労働組合全体を産業別組合に再編する提案を行った。こうした重要問題のほとんどについて，ヴァルヒャーら KPD 党員を含む DMV の代議員は，ディスマンに概ね同調したのであった。以上のような背景もあり，ディスマンは，DMV において左派を強化しよう，とヴァルヒャーに電話で持ちかけたのである。ヴァルヒャーはこれに同意した[61]。このように，

60）Engelmann, a. a. O., S. 42. 後者は当時の SPD 指導者の一人，ゼーフェリング（Carl Severing）の言である。

61）ヴァルヒャーは，1906年に DMV に加入し，特に第一次大戦後，DMV 内部の KPD 勢力のスポークスマン的役割を果たした。このため従来の研究では，ディスマンと対立する局面が強調される場合が多かったが，1998年に発表された伝記では，両者が共闘する場合が少なくなかったことが明らかにされた（筆者は未読）。Hoffmann, Simon, a. a. O., S. 118-21. 党以上に労組での活動を重視した傾向は（山田，前掲書，62, 102頁）共通していたといえる。そのためか，1927年に KPD を除名され，レヴィ同様，1960年代半ばまでその歴史から抹消されていた。フレヒトハイム他，前掲書，11，243頁。10月の蜂起については同書，164-82頁。著作として，ヤコブ・ワルヘル（松山止才訳）『フォードかマルクスか』（上野書店，1929年）がある。産業の合理化およびそれに賛同する SPD を批判する内容である。

SPD への復党は，皮肉にも，ディスマンが労働組合運動において，やはり左よりの立場にあることを浮き彫りにしたのであった。このままいけばディスマンは，組合内 KPD 勢力と結び，また違った立場で，その地位を確固たるものとするはずであった。だが事態は思いもよらない方向へと進んだ。

1923年初頭に勃発したルール闘争は，激しいインフレを誘引した。これにより自由労働組合全体が機能不全に陥る。DMV も財政に大きな打撃を受け，23年大会は，急遽翌年に延期されることとなったのである。右派の台頭に危機感を抱いていたディスマンは胸をなで下ろしたはずであるが，また違った事件が勃発する。1923年10月，KPD がゼネストと武装闘争を行い，それが中途半端な形で失敗に終わったのである。10月時点の KPD の指導者達の多くは，「日和見主義者」のレッテルを張られ，指導部を追われた。その一人がヴァルヒャーであった。非合法な政党となった KPD の新指導部の立場は，極左ともいえるもので，彼等はディスマンに対し，ヴァルヒャーさえも驚くほど，実現不可能な要求を突き付けたという。新指導部はいう。「我々に憎悪のこもった長話をさんざん浴びせてきたディスマンが，我々に協力を持ち掛けるなど」ありえない。さては「我々の顔に再び一撃を食らわせようとしているに相違ない！」。DMV を舞台に近づいたかにみえたディスマンと KPD の距離は，最早どうにもならないほど離れてしまったのである。

1924年２月大会時，DMV 内の KPD 党員の比率は，他の単位組合に比べれば依然高かった。大会の代議員中，約３分の１をそれが占めていたという[62]。インフレ後ということもあり，24年大会は波風が立つことはなく，ディスマンもその地位を守った。KPD 勢力は革命的闘争を要求はしたが，ディスマンがそれをうまくかわした感がある。だが大会と前後して，KPD 党員が DMV から大量に離脱する。DMV にとって大きな痛手であったが，自由労働組合指導部はこれを歓迎したという。これで DMV 内部には決定的に右派，SPD 勢力が多くなった。この時期，ディスマンは，23年のインフレ以降組合員の間に蔓延する連帯感の稀薄さ，運動に対する無関心に苦慮しており，どうしても受け身にならざるをえなかった。皮肉にも，こうした状況であったがゆえに，DMV 代表としての地位が脅かされることはなくなったのであった。

5　国会議員として，国際金属労連執行委員として

ディスマンは，1920年６月に行われたワイマール期２回目の共和国議会（国会）選挙に

62) DMV1924年大会についての記述は，Borsdorf, *a. a. O.*, S. 187 ; *Metallarbeiter-Zeitung*, 8. 3. 1924, Nr. 10, S. 19-21 ; 15. 3. 1924, Nr. 11, S. 24-25 より。ディスマンを含む現指導部が，代議員約 2/3 の承認により再選された。こうした無風状態といえる代表選挙のあり方は，1926年大会においても同様であったが，ディスマンの得票は，全177票中125票にとどまった。ブランデスとライヒェルは，いずれも141票であった。*Die siebzehn ordentliche Verbandstag des Deutschen Metallarbeiter-Verbandes in Bremen : abgehalten vom 2. bis 7. August 1926*, S. 299.

USPD から立候補し，見事当選を果たす。これ以降２度 SPD から立候補・当選し，その死まで国会議員であり続けたのであった[63]。

またコミンテルン加盟を強く拒否したディスマンであったが，労働者の国際的な連帯を軽視していたわけではない。むしろ逆である。1893年に創立された金属産業の労働組合の国際組織である国際金属労連（IMB），通称「金属インターナショナル」は，第一次大戦により活動停止を余儀なくされていた。だが，1921年12月31日，コペンハーゲンにおける会議より，実質的に再始動する。同会議に出席したディスマンは，４名からなる執行委員会のメンバーであり，その活動の中心的存在となった。IMB の目的は，金属労働者の国際的連帯，それによる平和の維持であった。ディスマンはそうした IMB の国際的な義務を極めて重大に考えていたとされる。ディスマンの死は，「DMV においてのみならず，インターナショナル［IMB］にも，著しく大きな打撃を与えることになった」と，『IMB 75年史』は記している[64]。ディスマンは，26年アメリカで行われた IMB 大会に招かれ，同年９月からアメリカに滞在していた。その帰途，26年10月30日，母国の大地を踏むことなく，洋上で心不全により急逝した。48歳という若さであった。レヴィによれば，寝る間さえ惜しみ「同志のために尽力し，憔悴していった」という。だが「愚痴をこぼすことは決してなかった。この男は，仕事に生き，仕事に殉じたのである」[65]。

Ⅳ　おわりに

以上，ディスマンの生涯を，可能な限り，政党人としての歩み，労働組合員としての歩みに大別し，跡づけた。両者の比較から明確となったことを以下に示そう。まず，少なくとも第一次大戦前までは，フランクフルトを中心とした西南ドイツにおいて，政党においても，労組においても，着実にキャリアを積んでいたということ，党・組合指導層に対し一貫して批判的な立場であったこと，そして第一次大戦を転機として，そうした批判的な立場をテコに，USPD および労働組合内反対派の上層へとかけ上がっていったこと，以上は共通していた。だが，第一次大戦後は明暗が分かれた。労組においては，DMV の代表にまで上り詰め，その地位を譲ることはなかった。だが，政党人としては，USPD では，常に党分裂を導く対立の渦中にあ

63) Krause, *a. a. O.*, S. 453, 459. 国会における活動の詳細は不明だが，21年に，失業と恐慌の原因として資本主義システムを批判したとの記述がある。Lieberman, B., “The Meanings and Function of Anti-System Ideology in the Weimar Republic”, *Journal of the History of Ideas*, Volume 59, No. 2, 1998, p. 363.

64) IMB における活動に関する記述は，Opel, *75 Jahre Eiserne Internationale, 1893–1968*, Frankfurt a. M. 1968, S. 67–68, 92, 94より。執行委員への就任自体は1920年である。

65) Levi, a. a. O., S. 1.

り，SPD 復帰後は出戻りの「反対派」として冷遇され，かつ KPD よる激しい批判に晒されたのであった。

ディスマンの生涯は，第一次大戦直後の時期を境に二分できる。上昇の前期，混迷の後期といってよいだろうか。ディスマンの「変節者」というレッテルは，その後期における，とりわけその政党人としての歩み・言動により形成された，と考えてよいと思われる。だが，それはディスマンが変わったというよりも，周囲の状況の激変に起因するものであろう。そうした中で，ディスマンが，生涯の後期に，最優先事項として一貫して譲らなかったものは，DMV の統一および自律性の維持であったことは疑いあるまい。

第一次大戦直後，約30年前は非合法な政党であった SPD は，政権の一翼を担うようになった。ディスマンがとりわけ生涯の前期に強く批判していた，ブルジョワとの連携を，平時においても実行したのである。それを横目に見つつ，ディスマンは，DMV 代表に選出される。この時 DMV は，労働条件を決定する労働協約の一方の当事者として法的に承認された直後であり，組合員数は第一次大戦前から約100万人増加した。彼は，約160万人の金属労働者の生活に責任をもつことになった。その一方で USPD は存在理由が薄れ，党の仲間であるはずの USPD 左派は，２つの重要問題を通じて，DMV の統一・自律性を脅かす存在となった。ディスマンは，極めて現実的な選択として，政党の分裂，党派的対立を惹き起こしても，DMV の統一を脅かすものすべてを排除しようとした。むしろ，DMV の統一維持のために，自分のイデオロギー立場を犠牲にしたとさえ見ることもできよう。また，ディスマンのスポークスマンとしてのキャリアは他の追随を許さなかった。アジテイターとしての能力も高く評価されていたと考えるべきである。それゆえ，どうしても常に対立の矢面に立たざるをえないこととなった。ディスマンに対する KPD からの厳しい批判は，彼の労働組合を最優先とする立場，現実感覚[66]，そしてスポークスマンとしての能力ゆえに導かれたものといえよう。「変節者」呼ばわりされるという，ディスマンの「悲劇」は，将来を見据え一定の範囲で理想を掲げざるをえない社会主義政党，日々の実践，日常活動が重きをなす労組，いずれにおいても責任ある立場にあったことに起因するのではないか。この時期，他に多くはない例のように思われる。だが，彼自身は，少なくとも表面的には，そのジレンマに苦しむことなく，何より労組での活動，その統一を優先したのであった。

では，「変節」前，ディスマンが生涯の前期に最優先事項としてきたものはなにか。常に改良主義的指導層を糾弾してきたことからすれば，プロレタリア階級闘争の推進がそれかもしれない。確かに彼は，折に触れ「革命」を口にしてきたし，生涯の後期においても「労働組合内で，その革命化」を主張している。だがそれは，ディスマンにとっては，彼が「マルクス主義

66）非現実的な，とりわけ危険を伴う理想論を認めないというディスマンの特質は，レヴィそしてモーガンよっても指摘されている。Levi, a. a. O., S. １; Morgan, *op. cit.*, p. 60.

中央派」あるいは「USPD 右派」と分類されるように，合法的，あるいは漸次的な方法で達成されるべきものであった。こうした意味で，彼の「社会主義に対する信念」は，「変節」というほど，前期と後期で大きく変わったようには思えない。例えば，ホフマンらは，既存の研究の多くがディスマンを「USPD 右派」と分類してきた点を批判し，むしろ常に「左側」にあったと主張している。彼らが深く分析しているわけではないが，SPD 復党後の主張を見る限り，DMV の統一を脅かさない範囲内で，ブルジョワとの妥協を一切拒否する姿勢は貫かれており[67]，ホフマンらの主張は頷ける部分が多いのである。いずれにしても，USPD 内部に，戦争への協力は勿論，協議会体制による労組の包摂やコミンテルンの独裁を断固として拒否し，かといって SPD に簡単には組みすることはできないとの立場をとる，右派内の左よりの勢力，あるいは中央派ともいうべき勢力が明確に存在していたことは疑いない。その中心に，ディスマンはあったのである。

「右翼よりもっと危険なのは SPD 左派の指導者である」[68]。KPD1924年大会においても，ディスマン（ら）は SPD 右派以上に敵視されていた。「変節者」とされた以上，同時代的には，こうした評価もやむをえない部分があろう。だが，本稿で検討した幾つかの事実を考慮するだけでも，後世の研究におけるディスマンの扱いは，不当なものと言わざるをえない。この一因は，やはり，ドイツの労働運動史研究においては，そのイデオロギー的な側面にとくに注目が集まってきたという点にあると考えられる。それゆえ，労組の統一のために，イデオロギー的な立場を犠牲にしてきた，ディスマンのような生き方は評価されないのではないか。こうした傾向は，膨大な蓄積のある KPD 研究においては勿論，「統一組合」である DGB の影響下にある研究においても，見受けられる。本稿で参照した DGB 初代委員長ベックラーの伝記には，20世紀初頭のフランクフルトを舞台に，彼がディスマンと一緒に活動していた事実が記されるが，あえて「政治的な意見が一致しているとは認められない」[69] ことが強調されるのであった。だが，今後の労働組合運動においては，イデオロギー的な要素の重要性が徐々に失われていく可能性があるように思われる。そうした場合，ディスマンのような生き方から学ぶべきものがあると思うのだが，どうであろうか。

ディスマンの生涯について検討してきた。その中で，疑いなく，前期後期を通じて一貫していたものがある[70]。それは，西南ドイツとりわけフランクフルトとの強い結びつきである。勿論，ディスマンは，特に1920年以降は，国会のあるベルリン，DMV 本部のあるシュトゥット

---

67) Hoffmann, Simon, a. a. O., S. 111–12. ディスマンは SPD24年大会において，ブルジョワとの連立を続ける指導部を批判し，階級闘争を主張している。*Dokumente und Materialien*, Bd. 8, S. 88.

68) フレヒトハイム他，前掲書，191頁。

69) Borsdorf, *a. a. O.*, S. 107.

70) 本文中にあげたもの以外に，①戦争に対する断固たる反対，②党内・組合内における徹底した民主化，分権主義等も一貫していたものと考えるが，これらの検討は別の機会に譲るほかない。

ガルトと，当時の交通事情を考慮せずとも，決して近いとはいえない，これらの都市の間を寸暇を惜しんで飛び回った。レヴィやアウフホイザーは，駅はもとより国会，ホテル等あらゆる場所で，書類でいっぱいの大きなカバンとタイプライターを抱え，次の会合へと急ぐディスマンの姿を頻繁に目撃している。週５日は夜行列車で移動することが普通であり，「プライベートな時間はほとんどなかった」[71]。だが，ディスマンとフランクフルトとの分かち難い結び付きを示す事例をあげることは，それほど困難ではない。第一次大戦開戦直後のディスマンは，「西南ドイツ全域の運動の中心であり，魂」[72] と評されるほどに，当地の者たちから絶大な信頼を得ていた。それがフランクフルトにおける11月革命の成功の要因であることは疑いない。また，19年３月の USPD 大会で行われた党代表選挙で第３位となったディスマンが，共同代表への再立候補を拒否した理由は，まず地域のために働きたいという意識であった。ディスマンの死に際し，フランクフルトにおいては KPD のローカル機関紙までもが，彼を称える追悼記事を掲載したのである。その編集長はベルリンの KPD 中央指導部に叱責されたという[73]。現在でも，当地には「ローベルト・ディスマン通り」がある。確かに，DMV 代表就任以降は，全国の金属労働者の利害を代表し，自由労働組合全体のため以上に，とにかく DMV の利益のために働いた。生涯の後期，ディスマンは，DMV の統一のために，政党の分裂も，それを渡り歩くことも辞さなかった。つまり「変節者」と呼ばれることも厭わなかったのである。そうした DMV が，1891年６月に創立された地が，フランクフルトなのであった。

---

71) Levi, a. a. O., S. 1 ; *100 Jahre Industriegewerkschaft*, S. 259.

72) 若き日から文字通り一心同体で常に行動を共にしたトニ・ゼンダー（Tony Sender）の回想より。Hoffmann, Simon, a. a. O., S. 108.

73) フランクフルトとの強い結び付きと同時に，KPD との激しい対立が窺えるエピソードである。Ebenda, S. 121. 勿論，DMVの機関紙はディスマンの死を大きく報じた。電報による第一報を一面トップで伝えた11月６日号に続き，11月13日号は，一面全てを使い，顔写真入りの追悼記事を掲載した。11月20日号は，一，二面の大半を割き，遺体の到着から葬儀（写真掲載）までの状況を報じた上で，DMV，IMB，SPD，自由労働組合等の指導者たちによる追悼文を数多く掲載した。だがそこに，KPD関係者から寄せられたものはなかった。*Metallarbeiter-Zeitung*, 6. 11. 1926, Nr. 45, S. 196 ; 13. 11. 1926, Nr. 46. S. 200 ; 20. 11. 1926, Nr. 47, S. 205-206.